

reset-N ver.23.0

閃光

夏井孝裕

佐藤佐吉演劇祭2008参加作品

開演前

音楽が鳴っている。
劇場中央に四角のスペース。その上にベッドがある。

Opening

夏井

皆さん、この劇場ありがとうございます。reset-N主宰、作・演出の夏井孝裕です。もうまもなくで開演となります。今しばらくお待ち下さい。

やがて、開演の準備が整う。

夏井のそばに女があらわれ、何か言葉を交わす。

夏井

始めましょうか。いつもの曲がかかります。

M1 "Wilson" by Saint Etienne

俳優たち、現れる。

皆が配置について闇

：プロローグ

劇作家 シーン1。プロローグ。

先生 また、よくない夢を見てしまう。もう会えない女性がいるのだ。

松下 七月二十*日、王子小劇場。

先生 俺の知らない、新しい恋人もそばにいる。

原田 リセットエヌ、閃光。

先生 俺は彼女に何かを伝えたいと思っている。そこは大きな交差点だったり、カフェだったり、劇場だったりする。再会するたびに彼女は、新しい自分の人生を進めているように見える。

長谷川 作・演出 夏井孝裕。

夏井 今回の舞台をどのように進めるかについて

先生 大きな、肉体的なダメージとともに俺は目覚める。全身が不吉な液体に漬けられたような感触だ。

夏井 今回の舞台をどのように進めるかについて、俺のほうにしっかりとしたヴィジョンがあるとはいえない。

先生 彼女に電話をかけてみようかと思うこともある。また君に会ったよ。もうやめてくれないかな。君に伝えたいことはもう何ひとつ残っていないんだよ。ききたいことを強いて探すならこうだ。君のほうでは俺の夢を見ることはあるの？

夏井 俺のほうにしっかりとしたヴィジョンがあるとはいえない。この直後に始まる場面すら俺は知らないのだ。

劇作家 君のほうでは俺の夢を見ることはあるの？ もちろん俺はそんな電話はかけない。かといって自分が大人だと思っわけにはいかない。よくない夢を見たよ。そう新しい恋人にいつてしまっからだ。未だに夢に見てしまっよ。それだけで全てが正確に伝わる。彼女は部屋にきてくれる。俺が夢を見るまでの時間を自分で満たすために。

足立 一時間二〇分前後の上演を予定しております。

夏井 このプロローグのあと、何が起るか俺は知らない。

劇作家 マルセイユからパリ経由で成田に着き、この部屋を借りて一人で住み始めた。妻と暮らしていた幡ヶ谷のマンションは出国前に引き払ってしまったので帰る家がなかったのだ。そのせいもあって、帰ってきたという感覚が薄い。来日した、という感じもあり、上京したのと近い感覚もある。新しい住まいに根を下ろすための作業に追われながらも、ここを終の棲家にするつもりもないのだという感覚がどこかに残っている。また、一時滞在だ。

夏井 何が起るか俺は知らない。俺というのはこの言葉を組み立てている劇作家の俺。過去の俺だ。

女 ……。

夏井

観客の前でこの言葉を発している俺はもちろん、これから舞台上で起こることを把握している。だが、書いている俺は何も知らない。一般的な演劇と逆のことが起こっている。殆どの場合、作者は結末までのことを知っていて台本を書き上げ、出演者はまるで一秒先のことを知らないかのように振る舞うからだ。今回の舞台は違う。我々は台本に何が書いてあるかを知りながら行動していく。作者のほうは一行先に何がくるかをしらない。

女

そうですか。

夏井

なに。

女

たいへんですね。

夏井

たいへんですよ。

女

がんばってください。

夏井

がんばります…。シーン？。「助走のための序奏」

助走のための序奏

ヒカル 耳ふさいで。

ヒカル、九重の手をとって自分の耳を塞がせる。

ヒカル 聞こえないと、響いて気持ちいいよ。

ヒカル、九重の耳を自分で塞いでキス。
長い時間、二人はキスし合う。
九重、ヒカルの顔中を舐める。

ヒカル うひー。

九重 さて。

ヒカル さて？

九重 会話をしよう。

二人、笑う。

九重 他愛ない話をしなくちゃいけない。

ヒカル ほう。

九重 導入にふさわしい、助走となるような。

ヒカル 助走ね。女装じゃなくて。

九重 助走助走。

ヒカル 除草でもなく。

九重 え。

ヒカル 女装して除草したら助走になるかな。

九重 ええと、

二人 女装して、除草して、助走。

九重 くだらないよ！

ヒカル もいっかい。

二人、もごもごとキスをする。

ヒカル 今のこね。

九重 うん。

ヒカル 「二人、もももごとキスをする」って書いてあるよね。

九重 もももごとね。

ヒカル もももごだったかな。

九重 まあまあもももごだったよ。

ヒカル なんかもう泣きそう。

九重 泣くなよ。

ヒカル どうするの。

九重 どうするって。

ヒカル このあとさ、「おもむろに立ちあがり、女装して除草する」って書いてあったら。

九重 ……。

九重、おもむろに立ちあがる。

そしてまた座る。

九重 さて。

ヒカル いやいやいや。

九重 今は、僕たちの時間じゃない。

ヒカル ん。

九重 役割を与えられた僕たちがここでどう振る舞うかを問われてる時間じゃない。作者の時間なんだ。

ヒカル 次の一行をしらないから？

九重 そう。だから、ここで何が起こるか、一緒に考えてみよう。

ヒカル うん。

長い間

二人、キスをする。

ヒカル えー。

九重 普通でしたね。

ヒカル あと何回くらいするんだろう。

九重 ♪キッスは目にするー。(ヒカルの目を舐める)

ヒカル ぐわー。

九重 この芝居は、俺がほかのひとと歌を歌ったときに終わる。

ヒカル あーそう。

九重 多分ね。

ヒカル 多分てなんだよ。

九重 全てのだしものが、最後まで上演されるとは限らないということ。

ヒカル そうというのは考えないでいいんじゃないかな。

九重 レスター・ヤングは演奏中に恋人から撃たれて死んだよ。

間

ヒカル そうというのは考えないでいいと思う。

九重 この劇団は前科があるんだよ。

ヒカル え。

九重 ドラマリーディングの作品が間に合わなくて、上演中に観客の前で書き続けて、本を舞台上にぶちまけて終演したことがある。スフィアメックスで。

間

九重 芝居は終わらなかつたけど、何かが終わってしまった。

ヒカル 他愛ない話じゃないね。

九重 全くだね。

ヒカル この芝居はちゃんと終わらせよう。

九重 ふふ。

ヒカル 終わらせないと、終わってしまう。

二人、ドアのほうを見る。

間

九重 まだ、登場できないね。

ヒカル 今出てくると意外性ないからね。

九重 ちょっと話の区切りだからね。

ヒカル やっぱり他愛ない話をしてないといけないんだよ。

九重 書けないくせにそういうとここだわりやがって。

ヒカル はい提案。

九重 却下。

ヒカル えー。

九重 うそうそ。

ヒカル 提案します。

九重 よし、それでいこう。

ヒカル きいてよ。

九重 うん。

ヒカル あたしたちしばらく、作者のことを忘れよう。

九重 ……。

間

二人、手をパンと合わせる。

そして間が持たない。

二人 ……。

またドアのほうを見る。

頭を抱える。

女 ねえ。

夏井 わあ。

女 あたし、行ったほうがいいよね。

夏井 ……どこに？

女 あそこ。あたし行こうか。待ってるし。なんか、もたなくなってるよ。

夏井 なんとかするでしょう。

女 でも、はなし進まないよね。ここは誰かいないと、まずいことになるのでは。

夏井 ……待ってるだけの芝居っていうのもあったよね。

女 あれだって、誰を待ってるかぐらいははっきりしてるし。

夏井 名前だけじゃない。

女 あの人たちは名前すら知らないんですよ。

夏井 いいじゃない。若い二人で、ラブラブしてれば。

女 あたし、やっぱり行く。夏井さん無責任すぎ。

夏井 待てよ。

女 待ちません。

夏井 『コドーを待ちません』…。

間

夏井 行ってどうするの。

女 ……え？

夏井 何も考えてないじゃない。困るよ。来られた方も。

女 ……行けば…。なんとかありますよ。

夏井 なるかなあ。

女 駆けつけることが大事なの。ここで見捨ててしまったら、あたしはあたしのことがきらいになる。

夏井 いったい、シミュレーションしよう。

女 シュミレーション？

夏井 シュミレーション。

女 シミュレーションでしょ？

夏井 ん。

女 シュミレーションじゃなくてシミュレーションでしょ。

夏井 まず、ドアのどこまで行って。

女 流された。チャイム鳴らしますね…。

アオイ、あられ、チャイムを鳴らす。

九重とヒカル、ほっとした様子。九重が出迎える。

夏井と女は気づかない。

夏井 で、主人公がドアまで行って「はい、どなたですか」

女 すみません、夜分に…。

夏井 はい…。

女 あの、隣のものなんですけれど…。

夏井 ああ…。どうかしましたか…。

女 ……。

夏井 どうかしましたか…？

女 携帯電話が…。電池切れです。

夏井 ……。

女 auの充電器、お持ちではないでしょうか…。

夏井 ……それじゃ、隣にへんなひとが住んでるって話になっちゃっよ…。

九重 すいません、ぼくDocomoなんですよ…。

二人 あ…。

アオイ そうですか…。どうしようあたし…。

九重 だいぶ歩きますけど、au/Docomoまで行けば充電できたんじゃないかな…。

アオイ あっ。そうですね…！ ありがとう！ありがとうございます！ありがとうございます！

アオイ、猛ダッシュで去る。
やや茫然とする九重。

夏井 ……。

女 いや、こっちは見られても。

夏井 ……。

女 起ったことは、すべていいことです。

夏井 ……隣に入んな人が住んでいる物語を、お楽しみ下さい。

隣人との邂逅

九重 ああびびった。

ヒカル なんだって。

九重 隣のひとの彼女だと思うんだけど。

ヒカル うん

九重 突然すみませんがこの充電器もってませんかだって。

ヒカル なんだよう。

九重 びびった。あえぎ声うるさいですとかいうのかと思った。

ヒカル 充電器あるけどな。

九重 貸す？

ヒカル いやー。どんなひと？ となり。

九重 よくわかんない。

ヒカル ふん。

九重 同じぐらいの歳の、男。ときどき夜中に音楽聴いててうるさい。

ヒカル いかんね。

九重 こっちもあえぎ声ひどいからな。

ヒカル ひどいかな。

九重 ひどいね。

ヒカル へへー。

九重 反省しなさい。

ヒカル 困る？

九重 ちよっとね。

ヒカル 困れ困れ。

九重 困る困る。

ヒカル あれしてよ。ボールギャグだっけ。

九重 えー。

ヒカル ちょっと興味ある。

九重 よけいうるさいよ。

ヒカル そうなんだ。

九重 喋れなくはなるけど声は出るでしょう。

ヒカル いいじゃん。

九重 ほんと追い出されるから。

ヒカル よだれとまんなくなるんだよねー。

九重 絶対やだね。

ヒカル 隣に借りに行こうか。

九重 え？

ヒカル 突然すみませんがボールギャグもってませんか。

九重 あったらどうするの。借りるの。

ヒカル それはそのときになってみないと。

九重 いやな近所づきあいだなあ。

ヒカル 女の子も借りたりしてさ。

九重 変態アパートだ。

ヒカル 素敵。

九重 向こうも借りに来るよ。

ヒカル そしたらしょうがないよね。

九重 ヒカル、喋るのやめ。

ヒカル やめ？

九重 エア・ボールギャグ。

ヒカル ふがふがふが。

九重 あ、でもよだれ禁止。

ヒカル ふがふがふが。

九重 ああ変態だ。

ドアチャイムの音。

九重 え。

ヒカル ふがー。

九重 しー。おすわり。

ヒカル ふが。

ドアチャイムの音。

九重 はーい。

九重、ドアをあける。

劇作家 すみません、夜分に。

九重 はい。

劇作家 あの、隣のものなんですけれど、

九重 ああ、

劇作家 いつも音楽とかうるさくてすみません。

九重 いや、そんなそんな。こちらこそ、あの、

劇作家 え？

九重 いえ、はい。

劇作家 ……ちよつとつかぬことをお伺いしますが、

九重 はい…。

劇作家 ドコモの充電器をお持ちではないでしょうか。

ヒカル、吹き出す。

九重 ありますよ…。

劇作家 なんか、どっかに置いて来ちゃったらしいんですよ。十分だけお借りできたらたいへん助かるんですけども…。

九重 ……ちよつと待って下さいね。

劇作家 ああすみません。

ヒカル ふがふがふが。

劇作家 え。

ヒカル ふが。

九重、ヒカルのあたまをはたく。

劇作家 ……すみません、持ってないんですよ。

九重 伝わったんだ！

劇作家 大丈夫です。何も恥ずかしいことはありません。

九重 ……。これで、大丈夫ですか。

劇作家 はい、助かります。ありがとうございます。

九重 ポストにいれといてください。朝までに戻していただければ。

劇作家 恐縮です。それではお借ります。

九重 さっきもあの、来ましたよ。女性の方。

劇作家 えっ。

九重 どの充電器をお持ちではないでしょうか。

ヒカル ふが。

劇作家 どのくらい前ですか。

九重 ほんとに今さっき。

劇作家 ……。

九重 次はソフトバンクの番ですね。

劇作家 死ねばいいのに。

問

劇作家 すみません。本当にご迷惑をおかけしました。

九重 いえ…。別に迷惑なことは何にもありませんから、

劇作家 わるいやつではないんです。しばしば人間の想像を超えた行動をとる、ただそれだけです。

九重 …しばしば…。

劇作家 まあ、そんなところがかわいいんですけど…。

九重 …ああ…。いいですね…。

劇作家 いえいえ。あなたがたも、素敵ですよ…。

九重 ……。

劇作家 そのまま、いってください…。

劇作家、親指を出してウイंक。

M.C.I.

：先生からの電話

先生　　ヒカルさん。

ヒカル　　はい。

先生　　約束を破ってしまつて申し訳ないと思います。電話しない約束だったのに…。

ヒカル　　はい。

先生　　今、僕は病院のロビーからかけています。事故に遭いました。

ヒカル　　そうですか。

先生　　自転車で走っていて、気がついたらベッドの上でした。頭蓋骨の中が出血しています。脳挫傷だそうです。

ヒカル　　……それが本当かどうかあたしにはわからない。

先生　　本当のことです。ヒカルさん。

ヒカル　　はい。

先生　　僕は怖い。怖いです。

ヒカル　　……。

先生　　僕は本当に死にかけました。脳の写真を三回撮られましたが一回しか覚えていないんです。でも怖いのはそのことではなくて、何か身体に後遺症が現れるかもしれないということでもなくて、ヒカルさんとも二度と言葉を交わすことができないかもしれないということなんです。

ヒカル　　……。

先生　　ヒカルさん、きいていますか。

ヒカル　　きいています。

先生　　……。

ヒカル　　それだけしっかり話せば、大丈夫じゃないでしょうか。

先生　　……。

ヒカル　　ごめんなさい。先生のことって、もう信用できないんです。

先生　　あなたに謝らなければならないことが僕にはたくさんあります。

ヒカル　　先生。

先生　　はい。

ヒカル もう先生はいっぱい謝ってくれました。何回も何回も、ききました。

先生 ……。

ヒカル でもあたし、もういいんです。

先生 僕が間違っていたのだと思います。

ヒカル ……。

先生 赦してください。

ヒカル 赦すっていいばいんですか。

先生 ……。

ヒカル 先生、死んでしまえばよかったのに。

先生 ……。

ヒカル ごめんなさい。本気で思ったんじゃないんです。

先生 僕は、離婚をすると思います。

ヒカル どうしてですか。

先生 君がそれを求めなかったから。

ヒカル ごめんなさい、もう切ります。

先生 ヒカルさん、僕は君の幸せを祈りません。

ヒカル もう切ります。さようなら。

先生 ……。

ヒカル 先生のこととはときどき思い出しますから。

女 ねえねえ。

夏井 ん。

女 なに今の。

夏井 ……シーン5、先生からの電話

女 ほんとうにあったこと？

夏井 ……それは無意味な質問ですよ。

女 だとしても、ききたくなる。

夏井 全部実体験です。

女 ……。

夏井 といったとしたら、何か、価値が上がるわけ？

女 なんだよ。

夏井 「本当にあったこわい話」…「実話を元にした感動の物語」…そういうのがいいなら、ドキュメンタリー作家だけいれればいいよね。これは演劇だから…。全部お芝居でしたっていうとき、それは本当のことではなかったという意味合いになる…。奇妙なことだよね…。

女 もっとシンプルに返事してほしい。

夏井 違う答え方をするならば…。全部本当に、俺の頭の中で起こったことだといえる…。空中から掴まえたアイディアも…自分の経験も…誰かの経験も…ほかの何かから借りてきたヒントも…。すべて同じ…。自分のことも他人のように書く…。他人のことも自分のように書く…。

女 質問を変える。これは、どういうものとして見ればいいのか？

夏井 観客の受け取り方は決定できないよ。エンターテインメントだと思ってもいいし、芸術だと思ってもいいし。ゲームでもあるしドキュメントでもある。総合芸術っていういい方したい一つの狭いカテゴリーだ。我々は演劇だと信じるものを作り、やるだけ…。そこにはアートの要素もあるし、事件という意味もある…。実験…。意思表示…。レジスタンスでもある…。治療であり同時に暴力…。それが今回の、そしてこれからの演劇の定義だ…。

女 ハイつぎ。つぎ。シーン7行きましょう。

夏井 ……アイスクリームを正しく食べる。

：アイスクリームを正しく食べる

ヒカル はい。

ドアを開けると女が立っている。アオイである。

ヒカル あー。

アオイ アイスクリーム、食べませんか。

ヒカル ……はい？

アオイ 買ってきたんです。

ヒカル アイスクリーム。

アオイ アイスクリーム。いるかなって思って買ってきたんですけどいなくてずっと待ってたんですけど帰ってこなくなってアイスクリーム、溶けちゃうんだあの、よかったら。お二人で。

ヒカル 今あたししかないんですよ…。

アオイ ああ…。

ヒカル 冷凍庫、いれときましようか。帰ってきたらノックしてもらって、そしたら

アオイ ダメなんですよ。こちらにご迷惑をかけたことがわかったらもうあたしほんとに。

ヒカル はあ。

アオイ いいんで、お二人で食べて下さい。

ヒカル あの、ありません？

アオイ え？ いやいやいやいや。

ヒカル 二人で食べましようよ。内緒にしときますから。

間

アオイ あの、

ヒカル はい。

アオイ いいひとです。

ヒカル いいひとかあ。まあどうぞどうぞ。

アオイ おじゃまします…。(あがつてくる) うわあ…

ヒカル 適当にこしかけてください。

アオイ なんか、全然違いますね。元は同じ間取りなのに。

ヒカル そうですか。

アオイ はいー。へー。

ヒカル はいスプーン。

アオイ すいません、なんか。

ヒカル そんなに違いますか？

アオイ はい。あっちはもう、本とCDばかりで。全部捨てちゃえばこうなるんだなあ。

ヒカル ふふ。

アオイ 片付けさせてもくれないんですよ。これはこのままじゃなきゃだめなんだって。

ヒカル おお、いいアイスだ。愛ですね。

アオイ ……。

ヒカル いつ頃帰ってくるんですか？

アオイ わからないんです…。

ヒカル ありやりゃ。

アオイ 鍵は持ってるんですけどね。

ヒカル へ？

アオイ 信頼してるよっていうことを伝えたいだけで渡されてる鍵だから、使えないんです。勝手に入ってほしくないことははっきりしてるし。

ヒカル おいしい。

アオイ ……。

ヒカル 早く帰ってくるといいですね。

アオイ アイス買ったなら溶けるまでに帰ってくるような気がしたんです。おかしいですよね。

ヒカル 食べまじょうよ。

アオイ ああ、そうか。

ヒカル 正しい食べ方してます？

アオイ え？

ヒカル はい、目をつぶって。

アオイ え？

ヒカル くちあけて。

ヒカル、アオイの分のアイスクリームをスプーンで食べさせる。

ヒカル おいしいですか？

アオイ すいません、ちょっと、どきどきして。

ヒカル これが正しい食べ方です。

アオイ ……。

ヒカル 味がうでしょ。

アオイ そうですね…。

ヒカル お返ししないといけないですよ。

アオイ ……。

ヒカル はい。

ヒカル、目をつぶって口をあける。

アオイ、ヒカルの分のアイスクリームをすくって食べさせてやる。

アオイ ……。

ヒカル んふふー。

アオイ これは、相手によるんだろうなあ…。

ヒカル それは、まだまだですよ。

アオイ そうですか…？

ヒカル どんな人とも美味しく食べられるようになりますね。修行すれば。

アオイ はあ…。修行したんですか…？

ヒカル まだまだ途中です。

アオイ ……。

ヒカル フフフフ。

アオイ あたしも修行したほうがいいんでしょうね…。

ヒカル 迷うんだったらやめたほうがいいですね。

アオイ そうか。

ヒカル お奨めしません。

ヒカル、アイスクリームを食べる。

アオイ うちのひと、いま脚本を書いているんですよ。

ヒカル 脚本家さん。

アオイ 劇作家です。

ヒカル どう違うんですか。

アオイ 舞台のほうだけなんです。

ヒカル シナリオライターっていうのは

アオイ それは映像のほうですね。

ヒカル はあ。

アオイ 劇作家なんです。

ヒカル、どう返事していいかわからない。

アオイ このあいだまで、彼は外国に行っていたんです。マルセイユっていうところなんですけど

ヒカル イタリアですね。

アオイ フランスです。

ヒカル ありゃ。

アオイ でも近いです。地中海側の港町です。

ヒカル いいなあ。

アオイ そこに1年、行ってたんです。文化庁のなんとか留学制度で。

ヒカル すごいひとだったんですね。

アオイ 一日一万円くらい支給されるんですよ。生活費として。

ヒカル いいなあ。

アオイ ユーロが高くてそれでも大変だったらしいですけど。

ヒカル 一緒に行ってたんですか？

アオイ …私は、帰ってきてから。

ヒカル はあ。

アオイ いま、書けないんですよあのひと全然。

ヒカル スランプですか。

アオイ 違うような気がします。

ヒカル ふむ。

アオイ もう書けなくなってしまったんだと思います。

ヒカル 溶けちゃいますよ。

アオイ あ…。

ヒカル ぐちそうさまでした。

アオイ、ぼんやりと手元のアイスを見ている。

アオイ …どうしてあたし、こんな話しちゃったんでしょう。

ヒカル アイスを正しく食べたからじゃないですか。

アオイ ああ…。

ヒカル もう一回やっただげまじょうか。

アオイ (真剣に) お願いします。

アオイ、目を閉じて口を開ける。

ヒカル、そっと食べさせてやる。

ヒカル わかんないですけどね。

アオイ ……。

ヒカル 書けなくなるっていうのは、もう書かないでいいっていうことなんじゃないですかね。

アオイ ……。

ヒカル もうそのお仕事から離れていいっていうことかもしれないですよね。

アオイ ……。

ヒカル つらいですか？

アオイ、食べながらそっとつなずく。

ヒカル よしよし。

ヒカル、アオイの頭を抱いてやる。
アオイ、静かに泣く。

：劇作家と劇団員

劇作家　このとき…。このときお客さんはどんな気持ちになるんだ？

間

マサコ　うー。

劇作家　きみは！

マサコ　えっ。

劇作家　きみが、初めてこの劇団を見に来たお客さんだとして、ここまでの展開を劇場で見せられて、どう思う？

マサコ　ええっと…。

劇作家　うん。

マサコ　なぜ見に来たかによるんじゃないでしょうか…。

劇作家　…ん？　どういふこと？

マサコ　例えば、ヌーヴェル・ヴァーグだと思ってきたお客さんは、これ違っただろって思つかもしれないです。

劇作家　……思うよなあ。

マサコ　スタイリッシュとかいう噂できたお客さんは、

劇作家　そう、それは毎回なんだよな。そこを期待してこられるとつらい。

マサコ　だから、全然だめですね。

劇作家　だめかあ。

マサコ　またあれですよ。設定をいかしきっていないとかいわれますよ。

劇作家　いかしきってないって何だよなあ。

マサコ　はい。

劇作家　いうのは簡単だけど、設定をいかしきった作品なんて、できたら、すごいぞ。空間を生かすきていないとか！　俳優を使いきれいでないとか！　お前が批評できてないよ！

マサコ　いや、そこに怒るエネルギーあったら。

劇作家　はい。

マサコ　リドリー・スコット、好きですよね。ブレードランナーの監督。

劇作家
うん。

マサコ
批判にも賞賛にも一切耳を傾けるなっていつてますよ。

劇作家
批判にも賞賛にも。

マサコ
そういうことですよ。

劇作家
そういうことか。

マサコ
あたしびっくりしましたよ。こんなにお客さんの反応気にしてるなんて。

劇作家
そう…？

マサコ
もっと何か、自分の信念みたいなので書いてるんだと思ってました。

劇作家
そうなんだ。

マサコ
はい…。

劇作家
一行ごとに考えるよ。次にこの言葉だとお客さんどうかなって。

マサコ
はあ。

劇作家
マルセイユのフランクたちも、驚いてた。どうしてそんなに観客のことはかり考えているんだって。

マサコ
あの人たちはまた、

劇作家
なあ。

マサコ
全然お客さんのこと考えてない感じでしたよね…。あの、いいですか？

劇作家
うん。

マサコ
名前はいえないんですけど、このままだと二人退団します。

劇作家
……。

マサコ
伝えるべきかどうか迷ったんですが、取り返しがつかなくなってるからでは遅いので…。

劇作家
わかった。

マサコ
みんな、怒ってるわけじゃないですよ。心配なんです。できることは何でもしようと思っ
ています。

劇作家
うん

マサコ
本当になんでも。

劇作家 感謝してる。とても伝えきれないくらい。

マサコ みんな、信じてるんで。

劇作家 こないだのことはどう思ってるの。

マサコ …それは、それぞれですよ。

劇作家 きみは？

マサコ ……きつかったです。

劇作家 それでもまだ信じられるのはなぜ。

マサコ わかりません。

劇作家 西巣鴨の稽古場で、俺は書き上げのことを断念した。出演者のみんなに、今回俺は最後まで書くことができないと思いますといった。

マサコ ききました。

劇作家 何で残ってる？

マサコ ……。

劇作家 あの時よりも今は遅れてる。ストーリーもわからない。君もやっと今登場したくらいだ。今回は仕上がると思える？

マサコ 仕上がります。

劇作家 ……。

マサコ この作品はあと数日で書き上がります。私たちは自信を持って初日を迎えます。

劇作家 そうかな。

マサコ それ信じられないなら今すぐやめればいいじゃないですか。

劇作家 ……。

マサコ もう一行も書かないで、みんなに謝って、劇場キャンセルして、劇団解散して、田舎に帰ってめそめそ泣けばいいじゃないですか。

劇作家 ……。

マサコ このあいだも、もう書けないっていいながら、台詞書きましたよね。もう書けないっていったのに。

劇作家 そうか…。

マサコ どうしてあのと書けたんですか。

劇作家 わからない。

マサコ よかったと思います。あれは。

劇作家 ……。

マサコ 早く稽古、再開しましょう。

劇作家 うん。

マサコ 大丈夫ですから。きっと大丈夫ですから。

：これは誰の話

女 これは誰の話だろう。

間

女 誰の話？

夏井 よくある話だよ…。世界中で起こっていることだからね…。

女 そういうことじゃない。

夏井 ん。

女 夏井さんは誰のためにこの話を書いているの。

夏井 きみのためー。ごめんうそ。…誰のためについていうのはないかな。

女 ものを創っているひとしか共感できないんじゃない？

夏井 身近に感じるひとと感じないひとはいるだろうけどね。でも書く方にとって切実なテーマかどうかというのが今回はだいじなことだと思う。自分にとって本当に切実な問題だっていうことに関しては胸を張れる…。

女 張られても。

夏井 書けないっていうことはどうして起こるんだろう…。実力と理想の差が大きいと当然書けない。こういうものが書きたいという理想。実際に書けるもの…。実力以上のものを目指してしまったときはそうなる…。問題は…書こうと決めたときにはそれが自分の実力に比べてどのくらい難しいものなのかかわからないということだ…。新しい挑戦をする限りそれは起こる…。誰も登ったことのない山の高さは、登るまでわからない…。

女 平地から測量すればいいんじゃないの。登れる高さかどうか。

夏井 書けるって思うから書き始めるわけさ…。

女 測量の技術が低いのか、登山技術が低いのか、

夏井 両方かな。

女 だめじゃん。

夏井 ……不思議なのは、書けたり書けなかったりすることだ…。なぜ書けないのかということよりも、なぜ書けたかのほうが知りたい…。走り高跳びの選手がある瞬間だけ3メートル跳べちゃうようなものだから…。

女 それたぶん、はたから見るとね。「メートルしか跳べない人がメートル五センチクリアしてるぐらいのことなんじゃないかな。」

夏井 ……それでもいいよ。

女
いいのか。

夏井
自己最高新記録であればいいんだ。

女
自己ベストを毎回更新するのはたいへんなことですよ。というか無理。

夏井
……。

女
まあいいです。次はどうなるんですか？

夏井
ヒカルという女の子が、自分を愛そうとしてくれた先生のことを思い出す。シーン10、回想。テルミンを鳴らす。

テルミンを鳴らす

先生、寝ている。

ヒカル。テルミンのスイッチを入れる。

ヒカル、テルミンのアンテナで先生の輪郭をなぞる。

先生、アンテナに手を伸ばし、音を変化させてみる。

しばらくそうしている。やがて先生はヒカルを抱き寄せる。

二人、しばらくテルミンを鳴らしている。

先生 何人ぐらいの人と寝たの

ヒカル 五十人までは数えてました。

先生 それは、楽しいのかな。

ヒカル そういふのじゃないですね。

先生 『舞姫タイス』という小説を読んだことはある？

ヒカル ないです。

先生 読んだら感想をききたいな。

ヒカル なぜ？

先生 愛と快樂と、信仰と幸福…。古代エジプトの修道院長と、美しい舞姫の話なんだけれど、
絶で笑えるよ。

ヒカル 壮絶な恋愛をしたいのですか。

先生 …いや、もう懲りたね。

ヒカル (テルミンを止める) 懲りた？

先生 もう、愛っぱいものでいい。

ヒカル あたしは気に入らない。

先生 なんで。

ヒカル 先生は、中学生みたいにつじうじ悩んで机で泣いてるほうがいい。

ヒカル、またテルミンを鳴らす。先生、微笑む

先生 ヒカルさんはおもしろいね。

ヒカル おもしろくないです。

先生 君は、あと五年早くここにきてくれればよかったのに。

ヒカル 中学生じゃないですか。

先生 どんな中学生だったの。

ヒカル 不登校でリストカッターでしたよ。

先生 そうか。

ヒカル 出会っててもいいことなかったですね、間違いなく。

先生 そんなにつらかったの？

ヒカル つらかったですね。もう終わりましたけど。

先生 どうやって？

ヒカル (テルミンを止める) …ヒントはここまでの会話の中にありますね。

先生 ……男の人と寝ること。

ヒカル うん。

先生 そういうもの？

ヒカル 生きてていいって思えますね。空白が埋まる。

先生 空白。

ヒカル カウンセラーとか精神科とか禅寺とか、いろんなとこ連れて行かれたんですよ。でも、お前はセックスしまくりなさい、っていわれた方がよかった気がする。

先生 そんなばかな。

ヒカル 或いは、大人になってしまくれれば大丈夫だよっていつてくれるとかね。

先生 それもないだろうな…。

ヒカル 五年前の自分に出会ったらね、誰とでも寝る療法を奨める。

先生 普通に恋人つくるのじゃだめなの？

ヒカル コンプレックスの塊にそれは無理なのですよ。

先生 ……。

ヒカル 彼氏作ればとかいわれる度に傷ついてた。

先生 今は？

ヒカル 今はこんなですよ。

先生 なにがほしい？

ヒカル ……先生は、なんでもしてくれますか。

先生 できることならね。

ヒカル セックスって、万能薬じゃないですね。所詮痛み止めなんだと思います。あたしは、捨てられてしまいたい。

先生 ……。

ヒカル 捨てられたい。ゴミのようにじゃなくて、ゴミとして捨てられたい。手も足も胴体もバラバラに切り刻まれて、半透明のゴミ袋に詰められて、雨の日に放り出されたい。小雨の日がいいけど土砂降りでもまあいいや。ダメだったなあって。終わったんだなあって。そういうふうに関わりたくない。

：パステイス

劇作家 昨日はどうも、ありがとうございました。ほんとに助かりました。

九重 あー、いえいえ。

劇作家 これ、つまらないものなんですけれど、

九重 いや、いいですよ、そんな

劇作家 お酒、飲まれます？

九重 はい。

劇作家 パステイスっていうんですけど、よかったら。

九重 ああ、じゃあすみません…。パステイス？

劇作家 水割りかソーダ割りで飲んで下さい。四十度あるんで。

九重 強いですね。

劇作家 はまる人と全然だめな人といるんですけど、はまると最高です。

九重 ありがとうございます…。マルセイユのお酒なんですか。

劇作家 そうです。よく知ってますね。

九重 なんか、行かれてたとか。

劇作家 ……アオイが来たんですか。

九重 僕がないときですよ。

劇作家 すみません、お邪魔しました。

九重 いやいや、僕たちはあの、家ではただダラダラしてるだけですから。

劇作家 あの野郎…。きつくいつておきます。

九重 いやいや、ホントにいいんですよ。

劇作家 そうですか？

九重 困ったときはお互いさまといえますか。

劇作家 そういつていただけると…。

九重 じゃあ、パステイス、トライしてみます。

劇作家

はい。

九重

水割りですね。

劇作家

シロップを入れる飲み方もあります。レモンシロップとか。

九重

はい。じゃあ、脚本ががんばってください。

劇作家

…ありがとうございます。

九重

おやすみなさい。

劇作家

おやすみなさい。

劇作家、帰る。

九重

……。

ヒカル、布団から出てくる。

ヒカル

酒だ酒だ。

九重

パステイスだって。

ヒカル

噂のパステイス。

九重

噂？

ヒカル

隣の女の子から聞いた。これかあ。

九重

水割りかソーダ割り。

ヒカル

割ると濁るんだって。

九重

へえ。ちょっと待ってね。(奥にグラスと氷を取りに行く)

ヒカル

ダメ人間がはまる。

九重

そうなの？

ヒカル

アブサンの代わりだもん。

九重

アブサンかあ。

ヒカル

ゴッホが飲みまくっておかしくなったやつ。

九重

怖いなあ。氷できてないけどいい？

ヒカル

いいか。

九重、パステイスをグラスに注ぎ、ミネラルウォーターを足す。

二人

おお…。

九重、ヒカル、「お先にどうぞ」「いえいえお先に」をしばらく手で結局ジャンケン。九重が負け、口に含む。

九重

……。

ヒカル、飲む。

ヒカル

……あたし、ダメ人間だわ。

：カスタネットを叩く

劇作家　　なんだこれは…。

アオイ　　うん。

劇作家　　この状態は、いったいなんだ…。

アオイ　　うん。

劇作家　　何を俺は待っているのだ…。本当に俺は、次の場面を書くためのインスピレーションを待っているだろうか。俺が本当に待っているものが破滅の瞬間でないと誰にいえるだろう。

アオイ　　うん。

劇作家　　俺は、誰にも雇用されていない。自分の劇団を持って、自分の作品のために書いてきた。書こうとしている。俺の雇用主は、俺か。違う。俺の…劇団だ。俺は、俺の主宰する劇団に、所属している…。

アオイ　　……。

劇作家　　俺は…やめたいのだろうか。やり遂げたいのだろうか。

アオイ　　うん。

劇作家　　大道具の仕事をやめたときのことを覚えている。最後の日に、瑞江の工場で5時までずっと、パネルを作って、着替えをして、仕事中心に来ていた作業着を廃棄コンテナに放り込んだ。ナグリも丸鋸も充電ドライバーもコンプレッサーも、差し金もラチェットも、もう扱わないでいいんだ。もう脚立に登らなくてもいいんだ。そう考えながら地下鉄でビールを飲みながら帰った。

アオイ　　うん。

劇作家　　あのとときの開放感は、はっきりしてた。もうその仕事をしなくていいということ。もっと好きになれそうな仕事へ飛び移ることができるということ。

アオイ　　うん。

劇作家　　劇作をやめるといふこととは違う。

アオイ　　うん。

劇作家　　書いたことのないタイプの作品を書けたと思ったとき、とても書けないと思った作品を書けたとき、特別な達成感はある。でもそれは、終わりじゃない。次には俳優たち、スタッフたちとの共同作業があって、観客との出会いがある。それをくぐり抜けるとまた次の作品だ。

アオイ　　うん。

劇作家　　俺は、天才じゃない。認めたくないことだったけれど。

アオイ　　そう？

劇作家　　そうだ。そこに、悲劇の根源がある。

アオイ　　……。

劇作家　　天才じゃない俺が、天才のやるべき仕事に取り組んでいる。

アオイ　　……。

劇作家　　なんだこれは……。これは、いったいなんだ……。

アオイ　　あたしは……。あたしのせいなんじゃないかって思ってしまう。

劇作家　　アオイのせいじゃないよ。

アオイ　　でも、あたしが単なる観客だったときには、天才だった。

劇作家　　そんなことはない

アオイ　　そうかな

劇作家　　そんなことはないよ。

アオイ　　誰と一緒にいるかっていうのは大きい要素ではないの？

劇作家　　……。

アオイ　　あたし、いなくなったほうが書けるのになって思うんだよ。

劇作家　　大丈夫だよ。

アオイ　　そう。

劇作家　　アオイのおかげで、立っていられる。

アオイ　　嬉しいけど……。

劇作家　　うん。

アオイ　　何もしてあげられないことがきつい。

劇作家　　いてくれるだけでいいんだよ。

アオイ　　あたし、カスタネット叩こうか。

劇作家　　ん。

アオイ　　叩くよ。カスタネット。

アオイ、カスタネットを取り出し、叩く。

劇作家 ……。

アオイ どう？

劇作家 いてくれるだけでいいよ。

アオイ、カスタネットを叩く。

アオイ どう？

劇作家 書けそう、かな。

：夏井は混乱する

女 このあとしばらく、執筆が止まる。

夏井 うん。

女 見失ったんだ

夏井 ちがう。見えてきたんだ。

女 見えてきて書けなくなった？

夏井 そう。見えてきて、わかった。これを、俺は書きたくないっていうことが。

女 ……そんなこといわれても。

夏井 書くべきものが見えてきた。参加者も面白いといってくれてる。分厚い霧が晴れて山頂が見えてきた。俺はね、本当にいま混乱してる。これまでにも、ラストシーンのイメージがそのまま書いたりしたことはあった。でもそういうのとは違う。本当に今は、自分が何を書いているのかわらなかつたんだ。誰も信じないだろうけれど…。

女 最初からそういうつもりだったんでしょ。

夏井 それはそうなのだけれども…。

女 いったいいい？

夏井 いったい。

女 あなたが自信を持って書いたかとか、書くつもりのないものだったかとかは、どうだっただけのこと。

長い間

女 伝わってるかな。

夏井 うん。いってることはわかる。

女 もっと露骨な言葉でいったほうがいい？

夏井 いや

女 必要ないよね。

夏井 うん。

女 そんなに深い話じゃないよ、これは。

間

女 とりあえず書かなきゃいけないのはどういうこと？

夏井 あの劇作家の話を進めたい。

女 何かが起こって書けるようになるわけ？

夏井 いや。そう簡単には書けたりしないよ。彼は。

女 うん。

夏井 泥沼にはまると時間はどんどん加速していく。あつという間に、みんなに約束した日が近づいてくる。すみません、もう少しだけ時間をください。いつまで待てばいいんですか。率直に言っ
て、いつまでに書けるとは確約できません。それでは困ります。何日までには書き上がると約束
をしてその日までに上げて下さい。俳優たちにとっては遅すぎる、劇作家にとっては早すぎる締
め切り日が新しく設定される。奇跡の瞬間は訪れない。時は小刻みな足取りで一日一日を歩み、
ついには最後の瞬間に辿りつく。劇作家は皆の前から姿を消してしまふ。

女 最悪だ。

夏井 最悪だよな。

女 じゃあ、さっさとそれ書けばいいじゃないですか。

夏井 ……かきたくねー。

女 まあ、書かなくてもいいかもしれないね。

夏井 なんで？

女 だって、もう説明しちゃったし。

夏井 あ、そうか。

女 その次のシーンでことでもいいでしょう。

夏井 すごいなそれ。

女 じゃあ、劇作家失踪直後。

夏井 君がいて本当によかった。シーン14, できないことはできない

：できないことはできない

アオイが泣いている。

マサコがなすすべもなく、泣きやむのを待っている。

マサコ うー。

アオイ ごめんなさいほんとに…。

マサコ いやあ、アオイさんのせいではないからこれは。

アオイ でも、あたしじゃなくてもっと、もっと、ちゃんとしたひとがついていれば、あー(また号泣)

マサコ またー？

アオイ もし、このままずっと連絡とれなかったらどうなるんですか。

マサコ 中止ですね。リミットはもう、とっくに越えてるんで。残念ですけど。

アオイ ずっと、ずっと頑張ってたのに…。

マサコ これ以上、追い詰めるのもよくないんじゃないかと話してるんですよ。

アオイ これ以上…？

マサコ 公演中止ってたいへんなことですけど、書けないなら書けないで…。極端なはなし、死んじやったら元も子もないわけですから。

アオイ そういうことはないと思いますけど…。

マサコ 大丈夫だから待ってるって、それだけでもいってくれたらみんな、待てるんですけどね。生きてるのがどうかともわからない状態だと…

アオイ すみませんほんとに…。

マサコ いや、もう謝らないでいいですよ。

アオイ ううううう。

マサコ 泣かないでください。ほんとに。

アオイ あの、離婚のときの話って、ききました？

マサコ いえ？

アオイ あたしもはっきりはきいてないんですけど…。

マサコ きけないですよ、あたしたちは。両方しってますし。

アオイ 落ち着いたら、直接きいてみてください。

マサコ なんですか。

アオイ あの人のことが、よくわかると思います。

マサコ でも、きけないな…。

アオイ そうですか。

マサコ ききたくない気持ちもあるし…。今のこの状況と関係ある感じなんですか。

アオイ …前の奥さんとうまくいったときはどうだったのかなって思うんですよ。

マサコ そうですね。

アオイ あたしは演劇のことなんか全然わかんないし…。

マサコ 泣かないでー。

アオイ あたし本当にどうしたら…

マサコ アオイさん。わたしたちは、何にもできないんですよ。

アオイ そうでしょうか。

マサコ 歯医者で、足をぎゅって突っ張っても痛くなくならない、みたいなものなんです。

アオイ ああ…。んん？

マサコ 何にもしてあげられないっていうことを受け入れないと、何にもしてあげられないんですよ。

アオイ んんん？

マサコ 何にもしてあげられないけどごめんねってだけ思っただけ思っただけ、何かしてあげられる…。できることしかできない…。でもそう思っちゃえばほら、できることは意外といっぱいあったりするじゃないですか。やるべきことから考えるんじゃなくて、できる ことから考えれば。

アオイ …大人ですね見かけによらず。

マサコ うるさいな。

アオイ もう一回、電話してみましようか…。

マサコ いや、待ちましよう。連絡する気になるまで。

アオイ 大丈夫でしょうか。

マサコ 今夜連絡ないとおしまいだっていうことは伝わってるわけだから。

アオイ　そうですね。

マサコ　信じましょう…。

間

アオイ　待ってるあいだ、カスタネットとトライアングル、どっちがいいですか。

マサコ　…できることから考えたんですね。

アオイ、カスタネットをマサコにわたし、自分はトライアングルを打つ。
マサコ、カスタネットでなんとなく合わせる。

マサコ　あ、いいかも。

アオイ　なんか、歌って下さいよ。

マサコ　えー。

アオイ　さんはい。

マサコ　♪(中谷美紀『砂の果実』を歌う

アオイ、平べったくなる。

マサコ　ごめん…。

：劇作家がセミをくれる日

ヒカル よー。

九重 おー。

ヒカル やってますか。

九重 何を。

ヒカル 元気ないなあ。おみやげ。

九重 え、何。

ヒカル 珍しい瓶のパスティス。

九重、がっくりと

ヒカル 飲まないのー。

九重 だってそれ、齒磨き粉の味するじゃん。

ヒカル 真人間め。あたし南仏いきたい。

九重 南仏？

ヒカル ビーチでトップレス。

九重 そういうイメージなんだ。

ヒカル あの人もう行かないのかな。

九重 隣の人？ 行かないんじゃない？

ヒカル そうか。

九重 あの人、昨晚泣いてたみたいだよ。

ヒカル え。

九重 ああああああって。聞こえてきた。三時頃かなあ。

ヒカル ええええ。

九重 あとね。拍子木みたいなカスターネットみたいな音がするの。

ヒカル 演劇で使うのかな。

九重 ああ、演劇かあ。

ヒカル 絶対そうだ。

九重 引越そうかなあ。

ヒカル まあ、飲みましようよ。

九重 それはちょっと…。ビール買ってくる…。

ヒカル はい。

九重、でかけようとするど劇作家

九重 うわあ。

劇作家 こんばんは…。

九重 こんばんは…。

ヒカル パスティスおいしいですー。

劇作家 ああ、ダメ人間ですよ。

ヒカル 南フランスいいですね。ほかには名物って何があるんですか。

劇作家 びっくりしたのはセミですね。

ヒカル セミ？

劇作家 パリとかって緯度が高くてセミがいらないらしいんですよ。だから南の名物みたいになっちゃって、土産物屋でよく売ってます。陶器のセミとか、ぬいぐるみのセミとか。

ヒカル かわいいんですか。

劇作家 かわいくないですね。

九重 あの、どうかしましたか。

劇作家 え。

九重 何かご用事だったのでは…。

劇作家 ああ…。いや、でもいいんです。

九重 いいんですか。

劇作家 やっぱりこれは、自分でしか解決できない問題です。

九重 はあ。

ヒカル 悩んでるんですね。

劇作家 ……実は…。

ヒカル はい。

劇作家 凶星です。

ヒカル じゃあまあ、よくわかんないですけど飲みましょう。

九重 ん。

ヒカル 新しいパステイスがここに 있습니다。なぜか。

劇作家 なぜだ。あの、よろしいんですか…？

九重 まあ、あんまり遅くならなければ…。

劇作家 本当に、ご迷惑ではないですか。

九重 いいですよ。ビール買ってきますから、待ってて下さい。

劇作家 あっ。じゃあ私、セミとってきますから。

劇作家、消える

九重 ……今あのひと、セミとってきますからっていった？

ヒカル いったね。

九重 普通はビールのほうだよな…。

九重、去る。

ヒカル 行くのか。あたしを一人にするのか。

ヒカル、寝ころぶ。

ヒカル めんどくさいですなあ。信頼は。

間。

ヒカル あ、怒ってんのか。

劇作家 ありましたー。(登場)

ヒカル ありましたか。どっぞどっぞ。

劇作家 セミです。

ヒカル セミですね。くれるんですか。

劇作家 はい。っていうか、いります？ 迷惑？

ヒカル これは、ほしかったんだこーいうのーっていうひとも、迷惑っていうひとも、いないものですね。

劇作家 一応マグネットになってるんですけど、

ヒカル ほう。

劇作家 陶器だから落とすと割れちゃうんですよ。

ヒカル やるせないなあ。

劇作家 劇団のみんなに配ったんですけど、みんな残念な表情になりますね。

ヒカル だいにします。あ、どうじょどうじよ。

劇作家 どうもどうも。

ヒカル お悩みはなんですか。

劇作家 ……今、脚本を書いているんです。

ヒカル はい。

劇作家 もうそれが遅れに遅れて、公演中止の瀬戸際にあります。

ヒカル たいへんですね。飲まないんですか。

劇作家 はい。いま飲むと全てが終わってしまいますから。

ヒカル じゃああただけ…。

ヒカル、パステイスを注ぐ。

劇作家 複雑な構成の作品を書いています。事実と虚構が入り交じるような。自分の話であると同時に誰の話でもない物語です。

ヒカル はい。

劇作家 複数の人物関係と問題が交錯します。まず、劇作家がいて、彼を支えようとする女性がいる。

ヒカル ほう。

劇作家 それとは別に、最後の愛情を失った男がいます。彼は年齢の離れた若い女性を愛し、一緒になろうとして叶わなかった男です。

ヒカル はい。

劇作家 不可能が宿命づけられていた愛です。もう一つ、物語を書く人物と、その物語に登場する人物との対決があります。

ヒカル ん？

劇作家 試してみれば一種の、記憶喪失です。初めのうちは自分たちが誰かの書いた物語の登場人物だということを知っていた筈なのに、彼らは忘れてしまう。全く思い出さないんです。自分たちの次の行動を誰かが書いていることを。

沈黙

ヒカル 面白いんじゃないですか。

劇作家 面白いと僕も思います。

ヒカル で、壁にあたっているんですね。

劇作家 あの人がビールを買いに行ったのはなぜだと思いますか。

ヒカル これが飲めないから。

劇作家、首を振る。

ヒカル ビールのほうが好きだから。

劇作家 そういうことではないんです。そうしないと物語が進まないからです。

ヒカル ……酔っぱらったかな。

劇作家 私はあなたからききださなくてはなりません。

ヒカル 何をですか。

劇作家 なぜそんなにまで多くの男たちからだを委ねてきたのか。

ヒカル ……。

劇作家 なぜ、先生とよんできたひとを拒んだのか。

ヒカル 彼、もうすぐ帰ってきますよ。

劇作家 いいえ。このあとこの部屋に入ってくるのは別の人です。

ヒカル ……そんなの無茶苦茶ですよ…。

劇作家 誰がやってくるかあなたにはもうわかっています。

ヒカル あなたはそこにいるんですか。

劇作家 見せて下さい。あなたの全てを。

ドアの向こうに立つのは当然、先生である。
チャイムの音。

ヒカル　なぜでしょうね。これから起こることをあたしわかってる。

劇作家　教えて下さい。

ヒカル　ドアの外に立っているのは九重くんじゃない。彼なら鍵を持っているし、ドアの鍵もかかってない。外は雨が降っている。その人は傘もささずに駅からここまで、若林四丁目八の十、熊谷マンション一〇一に辿りついたんだ。もう一度チャイムが鳴る。

チャイムの音

ヒカル　先生にこの場所を教えたのはあなたですか。

劇作家　あなただと思えます。

ヒカル　先生があたしに会いに来た意味をあなたはしっていますか。

劇作家、首を振る

ヒカル　すぐわかります。今、ドアが開く

先生、ドアを開ける。
背後で雨の音

先生　ヒカルさん、私です。

ヒカル　帰って下さい。何もいわないで。そのままドアを閉めて、帰って下さい。

先生　ヒカルさん…

ヒカル　あの頃のあたしはもう、死んだんです。

劇作家　書ける…。これで書けるんだ…。

劇作家、ノートを取り出す。

先生、ヒカルを抱きしめる。

劇作家　シーン17、先生の想い出と決意

：先生の思い出、先生の決意

先生　もしもし…。ヒカルさん…。また、電話します…。

ヒカル　先生のこと、少し考えてみた。

先生　もしもし…。私です…。また、電話します…。

ヒカル　大学の研究室で、先生はよく、女学生と遊んでいた。古ぼけたソファがあって、不思議な匂いのコーヒーを先生は入れてくれた。

先生　もしもし…。また、電話します…。できれば…お電話下さい…。

ヒカル　あたしはノックをせずに開けるのが好きになった。机の前で女学生を抱っこしておろしている先生を見るのが面白かった。一人で眠っていることもあった。そんなときは先生のそばで寝顔を見下ろしながらタバコを吸う。先生の似顔絵を描いたりするときもある。たまにほかの生徒がノックをする。あたしは助手のようにドアを開けてレポートを受け取り、シュレツダーにかけてしまう。

先生　ヒカルさん…。お話ししたいことがあります…。また…。

ヒカル　あたしは大学受験の頃に正常な眠りをなくしてしまった。上京して自分の部屋を手に入れてからも、色々な男の子と寝るようになってからも、二時間以上続けて眠ることができなくなっていた。でも、先生の研究室はよく眠れた。先生が生徒の誰かとキスしていても気にならなかった。その子が帰るとあたしは目をつぶったまま両手を差し出してみる。先生は気前よく抱きしめて頭を撫でてくれる。

先生　私です…。もう会えないことをどうこういうつもりはありません…。君に腹を立てているのではないのです…。私はあなたに…。…また電話します…。

ヒカル　ある日、ソファで目覚める。スキューバダイビングの夢を見ていた。大きな魚に胸を突き飛ばされて、あたしはどこまでもどこまでも沈んでいく。もう浮かび上がることができない。目を閉じて、目を開けると先生が机に向かって突っ伏している。一緒に寝てくれればよかったのに。覗き込むと机が涙で濡れている。大学って奇妙なところだと思う。泣いてみようかな、と思って試してみるがうまくいかない。

先生　もしもし…。どうか…。電話に出て下さい…。

ヒカル　次の日、気がつくあたしは先生に本格的に抱きしめられて、キスされている。Tシャツの上から先生の手があたしの胸をたしかめる。首筋を咬まれる。ジーンズのボタンが外される。困った先生だ。あたしは行儀よく先生の手を引きはがして服を整えて、先生のにやにや顔を引っぱたく。

先生　ヒカルさん…。もしこのままこうして二度と言葉を交わさない間柄になってしまうのなら、あなたが僕と分かち合った時間はいったいなんでしょうか。

ヒカル　先生は奥さんと離婚の危機にある。あたしはしらない。

あたしは夏休みまでに油絵料の男の子殆どと寝てしまう。先生はしらない。
先生は学生の誰かをひどいやりかたで捨ててしまう。あたしはしらない。
あたしは、あたしに夢中にならない先生が好きだった。先生はしらない。

先生は、先生に夢中にならないあたしを好きになる。あたしは知っている。
あたしは、変わっていく先生を見ている。
先生は、変わらないあたしを見ている。
緩やかに、ありふれた悲劇が近づく。

先生

ヒカルさん、私は、あなたの願いを叶えたいと思います。あなたの新しい恋人には決してで
きないことです。私と、会ってください。

ヒカル

先生、もう電話、しないで下さい。

劇作家

シーン18、望んでいたもの

：望んでいたもの

ヒカル 先生、あたしの病気を治してくれたのは先生でした。心からお礼をいいます。先生と会わなかったらあたしは汚ないボロ雑巾のままでした。先生…。みんな終わったんですね。家庭も壊して、職場も追われて、何もかもなくしてあたしの前に立っている。でもあたしは先生をあいしません。先生に捧げられる心はもうないんです。あたしももう終わりました。次々と名前も知らない男の人にもううのも、先生の腕の中で眠らせてもううのも、もう終わったんです。あたしは、この部屋に住む人と一緒になります。もう一人でも眠れるから。先生とのこともあの頃の自分も、この部屋に埋葬します。結婚して、子供をつくる。先生が壊してしまった家庭をあたしは作る。作者が書くとおります。

先生 それで、きみの願いは叶いますか。

ヒカル ……。

先生 きみの望んでいたのはそういう生活ですか。

ヒカル ……先生にはもう、関係のないことです。

先生 ヒカルさん…。雨が降っていますよ…。静かな…長い雨です…。朝までずっと降り続くでしょう…。きみはこんな雨を見る度に、あの夢を思い描いていた…。僕も同じです…。こんな雨が降る度に僕は…。君を切り刻むことを考えていました…。雨に濡れた白いゴミ袋を見ると、肉塊になったあなたが詰まっているような気がした…。

ヒカル やめてください…。

先生 きみが僕のそばから離れていったのは、あのときからです。密かな夢を打ち明けて、僕がこたえられなかったときから、きみの心はどこか違う誰かを求めて彷徨いはじめた…。

ヒカル ……。

先生 いま初めて、きみがハッキリ見えます。どうすればいいかあなたにはもうわかっている…。

ヒカル わかりません…。

先生 行きましよう。きみにとって最後のチャンスです。わたしのよういきみを愛する人はもう現れない…。そうでしょう…。

ヒカル、手で顔を覆う。

劇作家 もうすぐ、彼が帰ってきます…。

先生 ヒカルさん。お別れをしましょう。黙って姿を消すのはきみのやりかたではありません。彼の優しさにさよならをしなくてはなりません。

ヒカル ひとつだけ、教えて下さい…。

先生 はい…。

ヒカル これは…作者が決めたラストなんですか…。

静寂

劇作家 作者の望みでこうなったではありません。望んだのはあなたなんですよ…。

ヒカル そうですか…。

九重、入ってくる。手にビール。

ヒカル 九重くん…。

九重 ん…。

ヒカル ごめん…。

九重 ……。

ヒカル 本当にごめん…。

九重 ……謝るな…。

ヒカル ごめんなさい…。九重くんだけは、本当に愛してた…。

九重、ビールを開け、ヒカルの頭からかける。

ヒカル ……もう一日くらい、晴れてくれたらよかったのに…。

先生 行きましよう…。

音楽。

先生、ヒカルをつれて出ていく。

九重 うんざりだ…。本当にうんざりだ…。あんたは面白いのか…。面白いのかよ…！

劇作家 ……わかりません。本当にわからないのです。

九重 いい職業だな、劇作家ってのは。

劇作家 ……あなたもやってみればいいですよ。そうすればどんなものかわかるでしょう…。

九重 お言葉だね…。

劇作家

最初はいいいんです。自分の書いたとおりに役者が真剣に喋ってくれるだけで嬉しい。自分を出ていないのに、言葉のすみずみに自分がある。幸運が重なって上演がうまくいけば自分が天才だと思いきもことができる。地獄はもう、すぐそこです。書き続ける。書き続ける。書きたいことがなくなっていく。新鮮さも、興奮も、スリルももうない。考えても考えてもデジャヴの泥沼だ。前向きな気持ちで銀行口座の残高に比例してゼロへゼロへと落ちていく。表現をするために芝居をしていた筈なのに芝居をするために表現をしている自分に気づく。責任感と義務感だけで、ヒトの形をして立っている。

九重 やめりゃいいんだよ、書けないなら。

劇作家 …何か書けるんですよ…。自分にしか書けない何かが…。

九重 ああそう…。

劇作家 このあと、あなたならどんな場面を用意しますか。

九重 ん…？

劇作家 次の一行をどんな台詞にしますか…。

間

九重 俺なら、最初からこんな芝居はつくらないよ…。

劇作家 そうですね…。

九重 ここから何をどうすればいいっていうんだ…。

劇作家 「白痴の喋る物語だ。意味は何一つありはしない…」

アオイ 本当に、本当にそうでしょうか…。

アオイ、いつの間にかそこにいる。

アオイ それは、つらいです…。間違ってます…。何か意味があるって思います。思いたいです。

劇作家 外を降っている雨に、何か意味がある…？

九重 あいつにとっては大事なことだった…。

アオイ 全部意味があるんですよ…。ここで起こること全てに…。

アオイ、トライアングルを鳴らす

九重 意味あるか、それ。

アオイ あたしはいつか、何の意味もなく死ぬかもしれません。でも、今日あの人死ぬのは無意味なんかじゃない。

劇作家 それは、意味があってほしいという、きみ個人の願いです。事実とは別のものです。

アオイ そうだとしたら…。そうだとしたら、あまりにも…。

劇作家 帰りましょう。物語はもう、終わります。意味のあることを何も残さずに。

アオイ ここは…どこですか…。

九重 劇場ですとかいいだすなよ。

劇作家 ここが終着点です。旅の終わりです。

アオイ 嘘です。あなたはこんな物語を書こうとしてはいなかった。

アオイ、トライアングルを鳴らす

九重 それやめろよ。

アオイ ここで終わったら、これは単なるあなたの愚痴じゃないですか…。ひとにわからない苦しみを自分は抱えているんだって、そのことしかいってない…。自分と向き合う振りをしているだけ…。あなたは、ずっと別のことを考えてた…。

劇作家 誰の話ですか。

アオイ どうしてあたしを登場させたんですか…。あたしを登場させたのは間違いですよ…。だってあなたは、隣の部屋にやってくるあの子がほしかったのだもの…。書き直して下さい…。あつしのない世界を、書いて下さい…！

劇作家 それをやる意味はないんだよ…。きみはここにいるんだから。僕と一緒に、ずっと、いるんだから…。

アオイ 本当に望んでいたことじゃない…。

劇作家 そうだとっても僕は、受け入れる…。この世界を…。自分の可能性の限界を…。

劇作家、アオイを抱き寄せる。トライアングルが落ちる。

アオイ 何か忘れてる…。

劇作家 誰が…？

アオイ 誰か…。誰かが…。

劇作家 そうだ…。俺は劇団のみんなに連絡しなくちゃいけない…。

アオイ もう遅すぎる…。

劇作家 そうだね…。

アオイ もう遅すぎるよ…。

劇作家 それでも連絡しなくちゃ…。

アオイ まだ忘れてる…。

劇作家 思い出せないよ…。もう何も…。

夏井、手で合図をする。音楽が消える。

舞台上に九重と劇作家。

劇作家は夏井を見つめている。

夏井

現実とフィクションが交差するところに演劇をつくる。それがやりたかったことだ…。劇場。客席に座っているお客さん。お客さんのいない客席。光がある。それを生み出す照明器具がある。音がある。それを鳴らすスピーカー。操作するスタッフがいて、幕は僕の芝居にはたいいていないけれど…。日常の時間から少しずれた空間へのスライド…。俳優たち…。俳優たち…。そのからだ…。からだから出る言葉…。嘘を重ねる度に撒き散らされる本当のこと…。光が消えると闇がやってくる…。揺れ動く空気。重く固まっていく事実…。浪費されていく才能と時間…。それが演劇だ…。人がいる…。彼は台本通りに、稽古でやったとおりにやってくれるかもしれない…。一度もやったことのない何かを試そうとするかもしれない…。ある劇作家は自分の作品を主演している最中に咳が止まらなくなって舞台上で死んだ…。俳優を見つめるお客さんたちがいる…。舞台上の俳優から射殺されて客席で死んだ大統領がいた…。次の一瞬に何が起こるかは誰も知らない…。俳優も…。舞台監督も…。劇作家も、演出家も…。それでも演劇は進んでいく…。終わりに向かって…。誰でもしっていること…。誰も知らないこと…。どうして俺は、誰も知らないことを書かなきゃいけないものだと思いきんでいたんだろう…。違うね…。みんなしっていることを書いてもいいんだな…。大きな発見だ。俺にとっては何…。とにかく…。辿りついた…。これがやりたかったことだ…。これが演劇でないとしたら…。俺はもういい…。これはとにかく…。俺たちの芝居だ…。続けよう…。この次もその先も…。劇場で生き続けて、死のう…。

劇作家、夏井の横をすり抜けて出ていく

夏井

ラストシーン、最後の歌。

最後の歌

マサコ、カスタネットを叩きながら歌う。

九重 ……何の歌ですか

マサコ 倉橋ヨエコ『夜な夜な夜な』。

九重 いっこ多い。

マサコ 多いですね。

九重 で？

マサコ はい？

九重 なにしにきてんの。

マサコ ……ネクストナンバー、パープルヘイズ音頭！

九重 いいよ！ やめ！ あんただったのか毎晩毎晩カスタネット！

マサコ 違いますよ、それは。

九重 ああ？

マサコ 一〇二号室でずっとカスタネットを叩いていたひとは、もういなくなりました。

九重 そうか…。

マサコ そのカスタネットをきいていたひとも、もうどこかへ行きました…。行き先は知りません…。

九重 そうなんだ…。

マサコ もう、この壁の向こうは何もないんですよ…。あなたはひとり、静かに眠れるんです…。

九重 ……。

マサコ 歌いましょう。

マサコ、U Aの『電話をするよ』を歌う。九重も合わせて歌う。
舞台は闇に包まれる。

原田 リセットエヌがお送りしました。

終わり